

平成20年度 大垣市地域福祉推進大会 講演会



日 時 平成20年10月26日(日) 13時30分 ~ 15時30分

場 所 大垣市総合福祉会館 5階ホール

テーマ みんなで創る 地域福祉・地域防災

講 師 板橋区総務部契約管財課長(前板橋福祉事務所長)

NPO 法人東京いのちのポータルサイト理事

鍵屋 一 氏

どうも、皆さんこんにちは。

ただいまご紹介をいただきました鍵屋と申します。

今日は、「みんなで創る 地域福祉・地域防災」ということで、見守りあい、
支えあって地域福祉・防災をよくしていこうという趣旨でございます。

ここで、皆様にお尋ねしたいがございます。

東海地震、東南海地震、あるいは1891年に濃尾地震がありました。この大垣市で、私が生きている間に、こういう大地震が来るのではないかと思う人は拍手してください。

(拍手)

私が生きている間は来ないと思う方は拍手してください。

(拍手)

分かりました。来るという方が多いですね。

それでは、私はそういう地震に備えて、東海地震が来てもびくともしない家に住んで、家具は全部止めているから大丈夫という方は拍手してください。

(一人、拍手)

素晴らしいですね。お一人いらっしゃいました。その方以外はどうか。

ここで満場の拍手になるようでしたら、私は今日ここに呼ばれていませんね。

皆さんは来るかもしれないと思いながら、実際には、何も準備をしていないことです。

では、これがどういう問題を引き起こすのかを、一生懸命考えてみようというお話をさせていただきます。

もうひとつは、皆さん自身は、健康で、この地域福祉推進大会に来られています。しかし、ここに来たくても来られないお年寄りや、障がいをお持ちの方もたくさんいらっしゃいます。

そういう人たちを、災害時にどうやって守っていくのかという話をさせていただきたいと思います。

それでは、最も大きい地震ではありませんが、被害が大きい地震という事で、阪神淡路大震災の映像をご覧いただきたいと思います。

(参考映像を上映)

ここには神戸にいらっしゃった方はいないと思いますが、大変言いにくいのですが、実は、この規模の地震が、神戸のような大都市で起こった割には、被害は大変少ないものでした。

朝の5時46分でしたので、ほとんどの方が火を使っていませんでしたから、火災の発生件数は非常に少ないほうでした。しかも、この火災は、ほぼ無風でしたので、まっすぐ煙が上がっていますよね。関東大震災のような大火災にな

ることはありませんでした。

朝の 5 時 46 分ですので、電車にほとんど人は乗っていませんでした。もし、仮に 1 時間以上遅ければ、満員電車になっていたはずですよ。

そして、家族が自分の家にいました。家族の安否確認、帰宅困難者の問題が何も無かったのです。もし、これが昼間であれば、当然、お父さんは会社へ行き、お母さんも働きに行ったり買い物に行ったり、子供たちは学校に行ったりして家族がバラバラですから、その状態では、助け合いや消火活動もしにくいわけですよ。

神戸ではみんなで助け合っているいろいろなことをしましたと言われますが、それは、たまたま朝の 5 時 46 分で家族がいたからですよ。

そういうことを考えると、次に起こる大震災は神戸のように早朝ではなく、もっと厳しい時間に起こる可能性があるということなのですよ。

この阪神淡路大震災で公式に亡くなった方は 6、434 人と報道されていますので、我々は「6 千人の方が亡くなったのか」と数字で考えるのですが、実は、数字では捉えられない一人ひとりの思いがあります。

福祉でもそうですね。65 歳以上のお年寄りが何人いらっしゃいますとか、障がいをお持ちの方が何人いらっしゃいますとかは数ではないですね。

この方が苦しんでいらっしゃる、この方が大変だという、その方、一人ひとりであり、人間の社会は数だけでは表わせられないものがあります。

この後の映像は、息子さんを亡くされたお父さんへのインタビューです。

たまたまラジオ局がインタビューした相手が、息子さんを亡くされた方でした。

どういう風にお父さんがインタビューに答えているか、聞いていただきたいと思います。

(インタビュー音声)

50代後半の男性にインタビューしたところ、

「全部燃えてしまった。」「息子も死んだ。」

「まだ、安否が分からないのですか。」とラジオ局の方がお尋ねしたら、

「完全に燃えたから、死んだと思います。」「足までは出たのですが、頭が出なく、『もう、親父逃げてくれ』と言ったので、あきらめて出てきたのです。」と、淡々とお話されています。

あまりに大きいショックのときは、人は無表情・無感情になると言いますが、先ほどのお話を聞くと、本当に無感情になり事実だけをおっしゃっています。

やはり、一人ひとりの心の痛みに寄り添って、災害を考えなければいけないと思います。数字だけではなく、たくさんの悲しい物語が、わずか13年前に神戸にあったということを、今一度、思い起こしたいと思います。

では、どうしてこのような地震被害が起きたのか分析をしてみます。

まずは、家具です。タンスは必ず倒れます。

この中で、起震車を体験した方はおられますか。起震車と違って、家では壁が大きく傾きます。

ですから、必ず家具は倒れます。しかも、パタンと倒れるのではなく、吹っ飛びます。あるいは、ピアノなどは、ダンブカーのように突進してきます。

それから、残念ながら家が倒れることがあります。

また、必ず火災が起きます。大きな地震では必ずです。

日本列島は大変かわいそうな列島です。なぜなら、日本列島は、4枚の大きな岩盤の上に乗っているのですが、ユーラシアプレートというあまり動かない陸のプレートがあり、北の北米プレートもあまり動きません。ここに、フィリピン海プレートと太平洋プレートがあります。

そして、この辺りで4枚のプレートが押し合いをしています。あまり動かない陸のプレートに海のプレートが潜り込みます。結構くっついて動くので、このようにエネルギーが溜まり、ある程度で離れるのが、プレート型の大地震です。代表的なのが、今心配されている東海、東南海地震、関東地震などです。

つまり、これは偶然起きるものではなく、物理現象ですから、誤差があっても、必ず起こる種類のものです。

それで、その地震の発生確率は、東海地震では30年以内で87%です。東京でも70%です。

87%の確率から逃れることは不自然です。必ず来ると考えて、備えなければ

いけないレベルです。

では、ほかの危険と比べて、どれくらい違うのかを調べてみました。火災、事故、宝くじです。

火災で怪我をされたり亡くなる確率は30年間で0.2%ですから、この会場において火災で亡くなる方は本当に不運な人です。東海地震の確率87%と比べてみてください。

交通事故で亡くなる確率も0.2%です。おそらく、この会場において交通事故で亡くなる方は、運が悪くて一人いるくらいです。

一方、交通事故で怪我をする確率は大きくて20%あります。5人に一人です。

ここに並んでいる5人の方の一人は、30年以内に怪我をされるわけです。(この会場に)これだけの方がおられますので、かなりの方が怪我をされます。

過去30年以内に怪我をされた方はおられますか？ こんなにも少ないのですか。それでしたら、これからの30年は本当に気を付けなければいけませんね。

ジャンボ宝くじで百万円当たる確率ですが、日本では宝くじが年間1兆円以上売れますが、この宝くじが当たる確率は0.3%です。交通事故で亡くなる確率と、宝くじで百万円当たる確率はほぼ同じです。

でも皆さん、宝くじは買いますよね。なぜなら、当たるような気がするからです。ところが、交通事故で亡くなることを一生懸命考えながら生きている人はいません。みんな交通事故には遭わないと思っているわけです。

しかし、確率はほとんど同じです。

これだけ確率が高いので、交通事故には保険という制度があります。

車両には自賠責保険があり、怪我をさせたら治療代は保険から出ます。また、たまたま高収入の人に怪我をさせてしまった場合は大変なことになりますので、多くの方は任意保険に入って、十分な保障ができるようにしています。リスクに対し保険がつりあっているのです。

ところが、地震はこれだけ確率が高いのに関わらず、地震・火災保険に入っている人は、1/3 くらいしかいません。リスクと保険がつりあっていません。

これだけ高い確率なのですが、耐震性のある家とか、家具を固定しているとか、3 日分の水、食料を準備するとかの基本的な対策をしていない人が多いです。

だから被害が大きくなるのです。危険性を考えた備えが、天災の場合はほとんどされていないのが問題なのです。

これは、濃尾地震の写真です。大垣市のホームページに載っています。

今日、大垣駅から歩いてきましたが、商店街は一階が大きく開いている建物が多く、地震が起きると、その大きく開いているところがつぶれて、この写真の状態になりやすいのです。

せっかく、1891 年に大きな地震があったのですが、その教訓が生かされていませんので、さらに（商店街の）耐震性を高めなければいけません。

これを体験された方はもうおられません、このような記録は大事だという事で、市のホームページに掲載されています。

それでは、阪神淡路大震災の教訓を申し上げたいと思います。

まず、亡くなった方はほとんどが即死でした。ですので、住民の助け合いや、自衛隊の救助活動などをよく聞きますが、地震直後に亡くなっていますので、どんなにすばらしい救助体制があっても、絶対に助けられなかった人は5,500人いました。

つぎは、亡くなった原因です。一番の原因は窒息死です。

よく、圧死の方が多いように思うのですが、実は一番多いのは窒息死なのです。

窒息死というのは、重いタンスなどがのしかかり、息ができない状態です。よって、年齢は関係ありません。

このように、建物と家具の下敷きになってなくなった方は、全体の84%になります。

つぎに、火災で亡くなった人は12%ですが、先ほどのインタビューのように、家の下敷きになり、脱出できずに亡くなったのです。

(これは、) 関東大震災とは違います。関東大震災のときは、大丈夫と思われた大きな工場跡地に逃げたのですが、いくつもの火事が一緒になり竜巻のような火災旋風で亡くなったのです。

神戸の場合は、建物の下敷きになり、動けないところに火災があったのです。

残りの 3.2%は、生きているときに火災にあったのか、亡くなってから火災にあったのか分からない人になります。

そこまで考えると、死因の 99.3%、ほぼ 100%が建物と家具の下敷きになったことが原因になります。食料や水が無くて、無くなった方はいません。

火災は、自分の家にとどまらず、町全体に広がってしまいます。

なぜ、火災が発生するかといいますと、一番火災が発生した長田区、灘区は、建物の壊れた率が 25%と、4 分の 1 の建物が全壊しました。そこでは、10 万世帯あたり 25 件の火事が発生しています。

一方、建物の壊れた率が 5%以下だった北区、垂水区などは、ほとんど火災が発生していません。

だから、火災を発生させないためには、火を消すのではなく、建物を倒さないことが大事なのです。

建物が倒れないと、消防車が通行できたり、初期消火ができたり、救助活動をせずに消火活動に専念できるのです。

一方で、建物が倒れていると、そこから人を助ける必要が出てきてしまいます。建物が道路をふさいでいると消防車が通れません。

そういうことによって、多くの建物が壊れると、火災が多く発生し、倒れないと、火災はすぐ消せるわけです。

つまり、地震対策でもっとも大切なことは、建物の耐震対策になります。

このグラフを見てください。これも、神戸の非常に重要な教訓です。

亡くなったのが多いのは、お年寄りです。

それからもうひとつ、若い人が多く亡くなっています。20代前半です。この人たちは、学生や若いサラリーマンです。古い木造アパートの一階に住んでいて、つぶれて亡くなった方がほとんどです。

このような人たちは、実は国の宝だったのです。なぜなら、高いアパートに住まなかった親孝行な人達だからです。親を当てにするのではなく、サラリーマンで、自分でお金を貯めている人達が、古い木造アパートに住んでいて亡くなったのです。

親を当てにして、いい所に住んでいた人は亡くなっていないのですから、皮肉ですよ。

このような事が起きたのが阪神地域だったのですが、実はこれは、東京でも大阪でも京都でも名古屋でも同じです。

なぜなら、アパートの広告に耐震性について何も書いてないからです。アパートの広告に書いてあるのは、駅から何分、家賃はいくら、広さなど、生活の利便性だけです。

しかし、一番大切な命に関わる情報が書いてないのです。このアパートは耐震性がありません、あります、という表示をすべきだと思います。

この教訓を忘れてはいけないと思ひまして、紹介をさせていただきました。

このように、一番大切な地震対策は住宅の耐震化であり、その次に、家具の固定などの室内の安全化となります。

この地震対策の順序について、（ご理解を）よろしく願いいたします。

その解決提案といたしましては、アパートの耐震性を公表することです。これには意見がいくつかありますが、時間の関係で省略します。

それからもうひとつは、低所得者の方への対応です。

今日、明日の生活費に困っている方に、耐震補強は現実的ではありません。これは行政がやるしかないと思います。

今の医療は簡単な診断と同時に、簡単な初期治療をするのですが、耐震診断は、診断だけをして、金額だけを示して終わってしまいます。診断と治療をセットにしてやるべきです。それくらい大切なことだと思います。

それでは、要援護者の話に移りたいと思います。

この写真は、要援護者の方が防災訓練に参加している様子です。

この方が一番困るのは、私はトイレだと思います。このような状態の人が和式のトイレを使うのは大変です。ところが仮設トイレはほとんどが和式トイレなのです。

そうすると、この人は（一人では）仮設トイレが使いません。そうすると人

の手を借りてトイレを使うのですが、あまり人の手は借りたくありませんね。

すると、水分を我慢するようになります。水や食料を摂らなくなります。こうして、なるべくトイレに行かないようにするのです。

阪神淡路大震災では、水を取らずに、脱水症状になり、肺炎で亡くなった方がたくさんいます。

トイレは非常に大きな問題です。

私の友人が、中越沖地震へボランティアで参加したのですが、仮設トイレの多くが和式で、つかまるところがないので、ある方が便器にはまってしまったそうです。

これが実情です。仮設の洋式トイレはまだ少ないのです。発展途上国や60年前でなく、今、日本で災害が起こると、お年よりはトイレにも行けないのです。

災害対策はこのような人達のことを考えなくてはいけないと思います。

災害時要援護者といいますと、高齢者、乳幼児、障がい・難病をお持ちの方や外国人の方のことを言います。この会場に来ている方は元気な方ですので、本当に心配しなければいけないのは、この会場に来られない方々です。

その方々のために、どのような対策を採るのが、福祉から見た防災の考え方です。

私は、昔、防災課長をしておりまして、阪神淡路大震災で思ったのは、とにかく、人を殺さないことだ、建物を丈夫にして、家具をちゃんと固定しておく

ことだ、生きていれば、後は福祉に任せれば良いと思っていましたが、生き残った後も、やはり困るのです。その後の対策を考えることも大切だと福祉事務所でした。

これは、大垣市の洪水ハザードマップです。東海豪雨のような大雨が降ったら、大垣市がどれくらい水につくのかと見たら、びっくりしました。ほとんど水についてしまいますね。

私は、大垣市がほとんど水についてしまうことを知っていた方は、拍手してください。

(拍手)

私は、大垣市では対策ができていますので、水につかないと思っていた方は、拍手してください。

(拍手)

皆さん、水につくことは知っていらっしゃるのですね。

では、もう一度お聞きします。

私は、大垣市が水についてしまうことに備えて、いつでも避難所に行けるように、食料、水を準備している方は、拍手してください。

(拍手)

今日、来られている方は、地域のリーダーだと聞いています。

私は、地域のリーダーなので、隣近所に声をかけて、一緒に避難する自信がある方は、拍手してください。

(拍手)

これは、結構いらっしゃいますね。

人間は、自分自身だけの事だったら、面倒くさいのでいいや、と思うのですが、自分に役割がある方はちゃんと準備します。人間は人のためにだと、働けるのです。

これは、昭和 51 年の墨俣町です。

これはボートですが、楽しんでいるわけではありませんね。救命ボートです。このようなものを使って、みんな必死に逃げているところです。

これは、つい最近の平成 16 年 7 月の新潟県豪雨の見附市です。

これが 50 センチです。50 センチ水につくところになってしまいます。

これが1メートルです。1メートル水につくと腰までできます。この人達は、何の準備もしていませんので、寝巻きのままです。

先ほどのハザードマップを見ると、大垣市は大変なことになることがわかります。

これは東京ですが、このとき雨が降った時間は50分間でした。100ミリの雨が降り、コンクリートの堤防が壊れてしまいました。

このような大雨が降ったときに、お年寄りの方や、障がい者の方をどうするのでしょうか。

人数だけでなく、いろいろなお年寄りがあります。家族と同居していても仲が悪い家や、すぐ病気になる方などがおり、災害時にはだれもが要援護者になります。それに対して、十分な支援体制はできていません。

ですので、重点化、重い人から対策をしなければいけません。保護するにも限度がありますので、自分でできる人は自分でやっていただかなくてはなりません。

また、行政だけではできません。地域総ぐるみでやらなければいけません。

地域総ぐるみというのは、このようなことです。

Aさん、ちょっとここに寝てみてください。Aさんをひとり暮らしの寝たきりのおじいさんだとします。手が動きません。

ここで、大垣市で大変な豪雨があったとします。「Aさん、逃げてください。」
といっても、このままではAさんは亡くなってしまいます。

では、Bさん。こちらでおばあさん役をお願いします。BさんはAさんと仲
がよかったとします。では、Bさん、Aさんを助けてあげてください。

一人では無理ですね。どうすればよいでしょう。

Aさんを助けるためには、「大丈夫ですか」と、元気な人が来てくれればよい
のです。そして、少なくとも4人、できれば6人8人でAさんを避難所に運
べば助かるわけです。

ボートが必要なら、消防団員などにボートのありかを聞いたりする必要があ
りますが、その前の避難勧告が出た段階で、安全なうちに逃がしてあげればよ
いですね。

こういうのは行政にやってくれといっても絶対にできません。

なぜ、災害時要援護者の問題を地域総ぐるみでやりましょうと言っているの
かということ、そうしなければ（要援護者が）助からないからです。

大垣にも要援護者は数千人いると思いますが、その人達を助けるためには、
きちんと考えておかなければいけない事になります。

さて、市役所がやろうとした時、一番問題になるのが個人情報です。

本当は、地域の名簿を渡したいのですが、時々不心得者がいたりすると、リ
ストが外に出てしまい、取り返しがつきません。

ですので、行政はこのような名簿を渡すことができません。

さきほど（午前中に）安城市の方が講演をしていましたが、安城市では、行政が名簿をくれないので、民生委員や会長が、家を一軒一軒回って、要援護者台帳を作成する活動をしています。8割くらいのお年寄りが同意してくれたそうです。

そもそも、個人情報について誤解があります。

個人情報は、隠すことが目的ではありません。

たとえば、耳が聞こえないことを役所に届け出たとします。すると、講演会に手話の方を付けてくれるなど、健常者の方と同様の生活ができるように手助けをするなど、その方を幸せにするために個人情報を使います。

ただ使うだけではなく、有効に使うのです。

災害時に寝たきりの方のところに「大丈夫ですか」と声をかけるのは、まさに有効な使い方です。

個人情報はこのように有効に使うためにあります。

一方で、関係ない人に情報を流してよいものでもありません。

今の社会では、そのあたりに折り合いをつけてやっていく必要があります。

なかなか難しい問題ですが、隣近所でやるのには何も問題はありません。

松本市など多くの場合は、情報を地図に落として活動しています。

今までは知識編でしたが、これからは実用編です。どのようにやるのかです。

要援護者のために何をするのかといいますと、(それは)減災です。

先ほど、阪神淡路大震災の教訓を見ていただきました。地震直後に 5,500 人の人が亡くなっていますが、この人達は間に合いません。事前の対策をとっていない限り間に合いません。

ですので、事前の対策を一緒にやるのが大切です。避難させることよりも事前の対策です。

その前に、皆さんはお年寄りを助ける気持ちはあるが、自分では何もしていない状態ですので、まず、皆さんのご家庭で防災会議を開いてください。

大切なのは、まず、命を守ることです。次に、安否確認や避難方法です。家族の人は避難所を知っていますか。それから生活を守る備えです。

では、どうするのかを生活シーンごとに考えますが、これだけは覚えておいてください。

寝室です。人は寝室に一生の 1/3 います。つまり、寝室を安全にすれば 1/3 安全です。寝室にタンスを置いていることは自殺行為です。まして、タンスの目の前で寝るのは絶対にだめです。

この間、宮城県の地震にあった方にお話しを聞きましたが、タンスが、端から反対の端の壁を破ったそうです。

タンスを止めれば、震度 5,6 の地震は大丈夫かもしれませんが、震度 7 が来るかもしれませんね。すると、必ず倒れてしまいますので、タンスのそばにはいけません。

本当はタンスがないほうがよいのですが、少なくとも倒れることを考えて寝る場所を決めてください。

それから照明です。上から照明が落ちてきます。特に、つるし式の照明は地震で揺れて落ちてきます。

これも宮城の話ですが、2 階でおじいさんが叫んだので行ってみると、蛍光灯がすっぽりと首のところに挟まっていたそうです。しかし、これは偶然で、普通は照明に当たってしまいます。

また、カーテンも重要です。もしくは、カーテンだけではなく、窓ガラスに飛散防止フィルムを貼っておく。これは防犯にも役に立ちます。

あるいは、丈夫な窓ガラスにする手もあります。

窓ガラスは本当によく割れます。カーテンをしておけば飛散を防げます。夜は大抵カーテンをしています。昼でも薄手のものをしておくだけで大分違います。

このように、寝ている場所の安全化は非常に大切です。

あと、起きているときは家具固定が大切です。

倒れやすい家具とは、どのようなものでしょうか。

それは、食器棚が考えられます。もし、料理をしている場所のすぐ後ろに食器棚がある場合、地震が来ると、まず食器が飛んできて、その後、食器棚が倒れてきます。

次は、外出時です。職場ではどうでしょうか。

市役所では書庫などを固定しているのでしょうか。

そうなのです。学校などでも固定していないことが多いです。

また、路上ではどうでしょうか。たまたま、かばんを持っていたとします。

まず守らなければいけないのは、目と頭です。

ですので、この場合はしっかりと目をつぶって、かばんで頭を保護します。

かばんがない場合は、うずくまり、体の面積をできるだけ小さくしてください。

こうすれば、被害に合う確率は少なくなります。

このように、自分の生活における、寝ているとき、家で起きているとき、職場にいるとき、路上にいるときについて対策をとり、皆さんが安全であることが、地域を守る第一歩になります。

では、ただで今すぐできることはなんでしょうそれは転倒防止です。

家具だけでなく、テレビも止めなければいけません。

それから、置物にも注意が必要です。例えば、子どもの武者人形などがタンスの上に飾ってあったり、旦那さんが取ってきたゴルフのトロフィーや、子どもの賞状があったりします。そのようなものが、寝室にあるとピンチです。

テレビは必ず飛ぶといわれています。宮城県では震度6が3回あったのですが、3回ともテレビを飛ばしたという方もいました。

今度は避難時の場合を考えます。

一番よいのは、自宅に避難というか、自宅に居られることです。

よく私は、一階が水についても、二階に居られると言います。ハザードマップなどで2メートル以下ならば、二階に居れば大丈夫です。しかし、大垣は5メートルという所もありますので、自宅に居られないことも考える必要があります。

まず、自宅での避難では、最低限の生活の維持を考えます。

電気、水、ガス、電話は使えません。電気や水やガスが使える場合は、大災害ではありません。このような中で、トイレ、水、食料、明かり、火をどうするのかを考えます。

また、5メートルも浸水する所では、いざというときにすぐ逃げられる緊急持ち出しのお泊りセットなどを用意しておく必要があります。

板橋から民生委員さんたちが下呂温泉へ研修に行った時のことですが、ひ

とり暮らしのおばあさんが、具合が悪くなったときに119番をしようとしたけれど、着替えやその他の準備のことを悩んでいるうちに倒れてしまいました。そのため、社会福祉協議会で、病院へのお泊りセットを用意しました。その中に入れるものを書いておいて、すぐに病院へ行けるようにしました。

「安心箱」と呼んでいましたが、このようなものが大事だと思います。

そして、助かったときは社会活動として、救助や消火などの助け合いをすることが大切です。

それでは、実際に避難で大切なものについて考えます。

まずはトイレです。

トイレで一番有効なのは猫砂です。大のときは、トイレにごみ袋をかぶせて、そこに猫砂をひいてトイレをします。猫砂がにおいを取り、固めます。そのままゴミとして捨てられます。これなら衛生的で大丈夫です。

あと、大人用紙おむつも、安売りのときは1つが30円くらいですので、これを同じようにゴミ袋の上に置いて使用します。

携帯トイレもありますが、少し高いですので、猫砂や紙おむつを用意することが大切です。

水も、ミネラルウォーターや保存水を考えると大変ですので、水道水でよいです。水道水の味はよくないですが、使用後のペットボトルなどに入れておけば、1ヶ月くらいは保ちます。なぜなら、塩素殺菌をしているからです。大き

めなペットボトルなどに入れておきましょう。

食料も普段のインスタントを用意すればよいですが、大事なのはカセットコンロです。カセットコンロがあれば、水を沸かしてお湯を作れます。お湯が作れば、食事もできるし、ほかにも消毒などいろいろとできます。

ラジオや携帯電話の充電器の用意も大事です。

そういえば、さきほど大切なこととお話しするのと忘れていました。住宅のことです。

住宅の耐震化が大切なのですが、どのような住宅が安全で、そのような住宅が危険なのかを考えます。

CさんとDさん。お手伝いをお願いします。こちらに並んでください。

(二人を建物とみなします。)

どちらの住宅が強い住宅でしょうか。住宅を見るポイントをお話します。

Dさんは立派な頭、屋根を持っています。屋根が重い家はよく揺れます。Cさんは比べて小顔ですが、屋根の軽い家は小さく揺れます。

Dさんは背が高いですね。このように背が高い家は、当然大きく揺れます。小さい平屋建ては小さく揺れます。

中古は揺れたときに折れやすくなっています。新築は揺れても耐えられます。

後はバランスです。バランスの悪い家は地震に弱い家です。新築で、低めで、屋根が軽い家は地震に強いです。

皆さんのおうちはいかがでしょう。

それでは、話を戻しまして。

最後はやはり避難をしていただかなければいけませんので、避難支援プランの検討です。

大垣市は5メートルも浸水するかもしれませんので、どこに逃げるのかを考えておかなければいけません。要援護者のご家族で、どこへ避難するのか、だれが支援してくれるのか検討を進める必要があります。

本当の防災訓練とは、このお年寄りをあの避難所まで避難させるために、だれとだれとだれで助けるために一緒に訓練しようというものです。

消防署の消火活動を見学するのは、防災訓練ではなく、消防職員の訓練です。皆さんの訓練は、お年寄りをどうしたら助けられるかを話し合い、それを実践してみることです。まずは、一人から始められるとよいと思います。全員を助けるのはなかなか難しいです。

ところで、人はなぜ、なかなか避難しないのでしょうか。

福岡の例ですが、避難しない原因のひとつは、避難所が遠いことでした。

そこで、地域のリーダーの方が考えて、3分以内で全員が避難できる場所を用意しました。そうすれば、自分の家に近いため、いつでも自分の家に戻る安心感があり、早めに避難をすることができるのです。

公共施設、民間施設を問わず、デパートや銀行など、夜間必ず一人はいるところに避難するようにしました。

次は、安心手帳についてです。SOS ファイルとも言います。

それでは、Eさん。お手伝いをお願いします。

これは、福岡県の知的障がい者のお母さんたちが作った手帳です。自分の子どもが知的障がい者のため、誰かに助けてもらう必要がありますので、この手帳を作りました。

Eさん。この手帳を持ってください。

もし、災害発生後に、このような人を見かけたらどうしますか。大抵助けますよね。手帳を持っていなかったらどうでしょう。微妙ですよ。今、微妙ですから、災害発生後は無理です。知的障がい者は、外見では分かりづらいですからね。

また、知的障がい者ですので、この手帳をどのように持つのか分かりませんが、どのように持ってもSOSと分ります。裏向きに持っても分るようになっています。

黄色に黒が一番目立つため、この色にしたそうです。しかも、これは100円で買えます。

この手帳の中に何か書いてあるのか、Eさん、読んでみてください。

「本人確認用 名前・ニックネーム」

普段名前と呼ばれていないかもしれませんので、ニックネームを書くように工夫してあります。

この本人確認用は、ほかの人に渡してもよい個人情報です。この次からは、渡せない情報が書いてあります。

「緊急時の連絡先、パニックへの対応、親族の連絡先、関わっている福祉士、かかりつけの病院、病歴、使用している補装具・福祉器具、一日の流れや家での過ごし方、一週間のスケジュール、身の回りのこと、排尿、排便、生理、食事、入浴、歯磨き、洗顔、うがい、手洗い、つめきり、耳かき、散髪、髭剃り、衣服の着脱、好きな遊び、嫌いな遊び」

このようにきめ細かく伝えないと、子どもですので何かの拍子でパニックになったり、ひきつけを起こしたりしてしまいます。

でも、この子はこういう子ですが大丈夫なのですと、48枚もの紙に書いてあるわけです。障がい者のご両親の方は、自由な時間が少なくて気の毒ですが、ここまでの愛情を注いでおり、人間として大事なものを得ていると思いました。

福岡も断層があり、この間玄海島のところだけが割れたのですが、まだ市内は割れていません。いつ大きい地震が来るのかわかりません。もし、両親が亡くなっても、この子だけは助かってほしいという思いからできたのが、このSOSファイルです。今、全国で静かなブームを呼んでいます。すばらしいと思います。

決して、お金がかかる対策だけが防災対策ではありません。防災対策とは、「金

「を使え」ではなく、「知恵を使え、汗をかけ」だと思います。

そしてこの写真が、先ほどの下呂温泉での安心箱になります。

これも静かなブームになりつつあります。ひとり暮らしのお年寄りに、病院に行くためのお泊りセットを配り、(その箱の)上に何を入れればよいのかが書いてあります。

今度は福祉避難所の話です。

福祉避難所とは、災害時要援護者のお年寄りや障がい者の方が安心して避難できる避難所のことです。多くの場合は、福祉施設を指定しています。

しかし、福祉施設に重度の在宅の人が入ると、今までショートステイで通っていた人が来られなくなってしまいます。すると、その軽度の方を家族が支えなくてはいけなくなるので、あまり福祉施設を頼りにしてはいけないと思います。

いろいろなところにある養護学校、ホテル、旅館などや、このようなホールの一角を区切り、冬はストーブ、夏は氷柱、そしてトイレを設置し、家族の人が傍に居られるようにするだけでも、立派な福祉避難所です。

このような工夫をしながら、お年寄りが避難できる体制を作っていくことが大事だと思います。

この写真は山梨県の例です。ここでは公民館を福祉避難所として、お年寄りを運んでいるところです。一人のお年寄りを運ぶのに、4人の方がお手伝いを

しています。

山梨県のある場所では、福祉避難所はビニールハウスだそうです。ビニールハウスは、地震のとき、建物に比べてゆれませんし、外が見えますし、雨露がしのげて暖かいです。

それでは、最後になります。

まず、災害時に何をやらなければいけないのか。

最初にやらなければいけないのは安否確認です。

自分と家族の身を守り、そして要援護者の安否を確認して、自治会長などに報告することです。

そのために、だれが安否確認をするのか具体的な支援者を決めたり、準備をしたりすることで、日常生活も豊かになります。

それから相談活動です。災害時に相談することが大事なのです。

(例えば、私が)「今、お困りのことはありますか」と聞いても、「ありません」と答える人が多いのです。

つまり、知らない人に困ったことを話してもどうにもならないからです。知っている人でないと相談できないのです。このようなことができるのは、地域の友人だけになります。お互いに知っているから話すことができるのです。

ですから、(地域の方に)災害時に何か困ったことがないか聞くことは、非常

に大事です。

役所や社会福祉協議会などの職員がお話を聞くのは仕事としてです。仕事として聞いている場合は、やはりそれなりにしか答えてくれません。仕事ではなく無償の気持ちが大事なのです。

それを合わせて、私は「こころの支援」と呼んでいます。

地域の方々にとって、災害時で一番大切なことは、こころの支援をすることです。お互いに、心配し心配される関係を作ることです。

また、災害時に何かモノを送ったり、お手伝いをしたりすることは、「何かお手伝いできることはありませんか？」という「こころ」を形にただけなのです。

災害時の見舞金、義援金なども、「こころ」が根源にあり、その「こころ」を形にしたものが救援物資です。これは「こころ」を伝える手段です。

そして、一番「こころ」を伝えられるのは、顔を見ながらの付き合いです。

この「こころ」の支援はだれでも出来ます。おじいさんでも、おばあさんでも、障がいがある方でもぜんぜん関係ありません。

災害時において、地域社会で役に立たない人はいません。要援護者ほど、普段からこのような悲しみを感じていますので、声をかけることの大事さをよく知っています。要援護者こそ、優れた「こころ」の支援者になると思います。

平常時から災害時要援護者を考えることは、本当は災害時にその人を要援護

としない、出来れば支援者になっていただくことであり、このようなことが地域の役割だと思えます。

このような災害時への備えが、ご近所付き合いの復活につながります。

要援護者の避難訓練をすることで、難病患者さんと地域との交流が復活したり、おばあさんの見守り活動に若い男性が参加してくれたことにより、おばあさんと若者との交流が盛んになったり、高校生が高齢者の安否確認のために毎日まわることや、大規模団地で災害時のためにお年寄りの家をまわるなど、災害を名目に、いろいろなご近所付き合いが出来るようになってきています。

私たちは、今まで自助・共助・公助として、自分ひとりで、地域で、行政でがんばるようにしてきましたが、自助では全ての方が耐震補強が出来なかったり、共助においても、見守り活動や安否確認がまだ不十分だったりします。

公助で避難所を作り、救援物資を用意すると言いながら、やはり、庁舎を耐震補強できなかつたりします。

今までのように役割分担を決めるだけでは、不十分だと思えます。

これからの自助・共助・公助というのは、自分自身である程度は備える、助かるように対策する、それを地域社会が支える。そして、行政がこのような動きをサポートすることだと思えます。

そして、要援護者対策には長い時間がかかります。

初めは一人の防災訓練から始まります。町内会などで、ある一人の方をどの

ように助けるのか、みんなで話し合いをする。そして、一人を二人に、二人を五人にとだんだん増やしていき、確実に進めていくのです。

時間はとてもかかります。やることはたくさんあります。だけど、みんなで力を合わせて、一歩ずつ、よりよい地域を作っていく覚悟で、10年20年かけて地域の力を蓄えていきましょう。

それぞれの地域で、自助・共助・公助が出来ると思います。今までのやり方だけではうまくいきません。

それでは、私の好きなダーウィンの言葉を紹介して終わりにしたいと思います。

進化論で有名な彼はこうっています。

「もっとも強いものが生き残るのではない。もっとも賢いものが生き残るのでもない。生き残ったのは変化するものである。」

皆さまのこれまでの災害への備えを改め、考え直す。地域社会の助け合いを改め、考え直す。

そして、今までのやり方を変えることで、おそらく来るであろう東海地震などに備え、助け合いの力を強めていくことが大切であると考えます。

本日は長時間にわたり、ありがとうございました。